題字　島田聖翠

みなさま、明けましておめでとうございます。今年がおだやかな年になりますように。戦火が早く止んでくれるのを祈るばかりです。

昨年は寂聴三回忌のイベントを無事終えることができました。参加してくださった方々に感謝いたします。

今年はNHK大河ドラマで「光る君へ」が放送されます。出版界は、にわかに源氏物語ブームとなり、多くの源氏物語や紫式部関連の本が刊行されています。

寂聴訳の「源氏物語」から名場面ばかりを集めた『寂聴　源氏物語』（高木和子監修　講談社）も命日に発行されました。源氏物語の概略を知るには最適かも知れません。

文学書道館の寂聴記念室の中央では「源氏物語の花々」と題した、登場人物と花を紹介する展示も12月までおこなわれています。寂聴さんの著書『花のいのち』に収録されているエッセイがもとになっています。

紫式部が源氏物語の着想を得たといわれている滋賀県大津市の石山寺（鷲尾龍華座主）は、今年もたくさんの人が訪れることでしょう。

寂聴文学を愉しむ会

今年はまず会員だけで読書会「寂聴文学を愉しむ会」を年間5回、開催してみようと思います。しばらく続けているうちに、いい運営方法も見つかることでしょう。課題本は寂聴さんの第一短編集『白い手袋の記憶』にします。この本は、33歳で出版され、寂聴さんが同人誌「Z」に発表した作品や、実質的な文壇デビュー作となった作品、敗戦を経て自我にめざめ、文筆で生きていこうとする決意を述べた文章などが収められています。原則として、4、6、10、12、2月の第3金曜日、13時半から15時半、文学書道館2階でおこないます。参加費（1回・500円）。『白い手袋の記憶』（小学館・650円）をご用意ください。

第1回
4月19日(金)
「女子大生曲愛玲」を読む
担当　竹内紀子

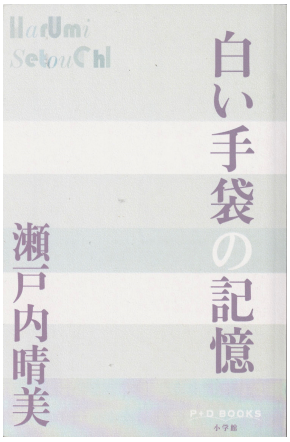
第2回　6月21日（金）
「吐蕃王妃記」を読む
担当　大石征也

第3回　10月18日（金）
「塘沽貨物敞」を読む
担当　竹内紀子

第4回　12月20日（金）
「川風」を読む
担当　大石征也

第5回　2025年2月21日（金）
「白い手袋の記憶」「痛い靴」を読む
担当　竹内紀子

参加希望者は事務局までご連絡ください。参加できる回のみの出席も可。



第３号
2024年1月15日
発行　瀬戸内寂聴記念会

徳島市新町川水際公園にある
文化勲章受章記念碑「ICCHORA」

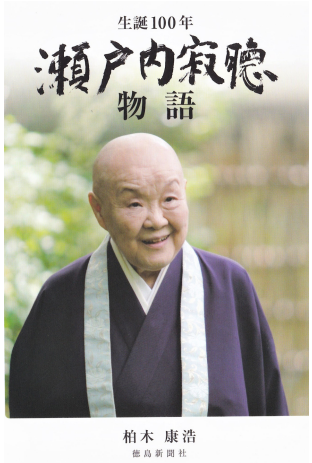
瀬戸内寂聴物語　朗読会

3月15日（金）13時半～
文学書道館2階講座室
入場無料（先着60名）
主催　夢はかり朗読会
協力　瀬戸内寂聴記念会

『生誕100年　瀬戸内寂聴物語』の著者、柏木康浩さんをお迎えし、トークをしていただきます。

また、「瀬戸内寂聴物語」と、関連する寂聴作品4作を朗読し、寂聴の文学世界を味わいます。朗読者6名は全員、瀬戸内寂聴記念会の会員です。

トーク　柏木康浩（徳島新聞記者）



朗読

・寂聴の文学遺産「瀬戸内寂聴物語」より　斎藤弘江
・寂聴作「花芯」　森　裕子
・寂聴作「みれん」　藤村純子
・寂聴作「青鞜」　元水　薫
・寂聴作「寂聴巡礼」　斎藤礼子
・寂聴作「寂聴巡礼」　渡辺久美子

寂聴三回忌 行事の報告

11月3日　寂聴忌朗読会「伊藤野枝物語」

関東大震災直後、官憲に殺された社会活動家・伊藤野枝の生涯を寂聴さんの代表作「美は乱調にあり」・「諧調は偽りなり」から台本化しました。1時間20分の長丁場でしたが、寂聴記念会会員5名が朗読し、100人の聴衆が真剣に聞いてくれました。（朗読者　川端恵美子、斎藤礼子、松尾清美、森君代、森裕子）

伊藤野枝は寂聴さんがその生き方に憧れた一人です。没後100年のこの年に紹介できたことは幸いでした。

11月9日　寂聴忌セレモニー

文化勲章受章記念碑「ICCHORA」と生誕100年記念碑のある新町川水際公園でセレモニーをおこないました。初めに「寂聴さんへの手紙」を読み、15名の参加者で『場所』より「中洲港」の一節を輪読しました。

「寂聴さんへの手紙」

先生が亡くなられて2年が経ちました。今年は黒田杏子さんや齋藤愼爾さんも先生のもとへ行かれて、そちらで楽しく句会をされているのではありませんか。今年は先生を偲ぶ「寂聴を詠む」俳句募集をおこないました。全国から1221人の2288句が集まりました。先生のことを思う方々がたくさんいることがうれしく、有り難く思いました。

最優秀句は

「寂庵に月　原稿用紙ましろ」

でした。誰もいない寂庵の書斎、窓際の机のうえの原稿用紙に月影が差す光景が浮かびます。真夜中のひとりの書斎が、先生はお好きでしたね。

今年は出家50年ですね。紅葉のもえさかる岩手県の中尊寺で髪をおろされてから半世紀が経ちました。もうじき出家記念日の14日が来ます。忘己利他の精神を貫き、ペンをはなさず、天台寺の復興に力を尽くし、平和のために祈り、災害のたびに駆けつけ、毎月全国から集まる人たちに法話をした日々。どれだけ大変な毎日だったでしょうか。でも、心は自由で清々しい日々だったことかと思います。

瀬戸内寂聴記念会を作って2年目、「寂聴」第2号もできました。今年は去年よりも多くの人が書いてくれました。

「ICCHORA」の前で輪読する会員

富士茂子さんを支えた長い年月のことも書かれています。今年は伊藤野枝物語の朗読会をし、11日には先生と一緒にハンストをされた鎌田慧さんをお迎えして講演会も開催します。来年は読書会も始めます。見守っていてくださいね。

記念会の仲間とともに、先生の文学を味わい、愉しんでいきます。

2023年11月9日　寂聴忌

記念会事務局長 竹内紀子

11月9日　寂聴忌句会

午前中のセレモニーの後、午後は文学書道館にて「いい句作ろう寂聴忌」のキャッチフレーズのもと、「寂聴忌句会」を開催しました。11名参加、27句が集まりました。

参加者全員がそれぞれ特選1句・入選4句を選びました。初めて句会に参加された方も多かったのですが、全員の句が選ばれ、寂聴さんへの懐かしい想いを語りあう、楽しい句会となりました。

句会で選ばれた句を掲載します。

笑まふ眼がふいに光りて寂聴忌　幻太
ほんたうの哀しみは秘め寂聴忌　幻太
ああ先生ガザウクライナ寂聴忌　真理子
「忘己利他」声さやかなり寂聴忌　純子
雨降らば降れと覚悟す寂聴忌　裕子
雲流れ「ICCHORA」くぐる寂聴忌　純子
嵯峨野には寂庵ありて虫しぐれ　裕子
寂聴忌星にささやくないしょごと　征也
「死んだら終わり」とはならぬ寂聴忌　理香
寂聴忌いつまで経っても阿波訛り　薫
特注の酒は「白道」寂聴忌　幻太
遅咲きの二人を照らす薄紅葉　裕子
源氏読む男の子生まれむ寂聴忌　征也
庵にもぞめき届きあま踊る　環
寂聴忌本日も青天まっさお　耕一
なつかしき人々集う寂聴忌　紀子
昼を鳴くこおろぎの宴寂聴忌　征也
貞心尼の手毬ころがり寂聴忌　薫
寒月や見送る女将博多弁　理香
うす陽さす午後の眉山や寂聴忌　征也

11月11日　鎌田慧 講演会

「美は乱調にあり　～大杉栄没後　一〇〇年　現代社会への問い～」

徳島県立文学書道館1階ギャラリーにて開催しました。参加者は75名。

これに関連して大石征也の「寂聴忌イベント余話」と題したエッセイを次ページに掲載しています。

俳句募集「寂聴を詠む」について

寂聴三回忌記念として企画した「寂聴を詠む」には、5月から8月までの3か月間に、全国から2288句の応募がありました。

入選句及び選評については、11月9日発行の寂聴記念会機関誌「寂聴」第2号に掲載しました。

寂聴忌イベント余話

鎌田慧氏の置き土産

大石征也

11月9日は、瀬戸内寂聴記念会に集う私たちが、胸に刻んでゆめ忘れることのない「寂聴忌」である。

没後丸二年となった昨年の祥月命日およびその前後の日、記念会では追善と顕彰を兼ねたいくつかの催しを行った。そのひとつが著名なルポライターの鎌田慧氏を招いての講演会だった。三回忌にふさわしい講師として鎌田氏に白羽の矢を立てたのは、ほかでもない、東日本大震災発生（２０１１年３月11日）直後に起きた原発事故を受けて巻き起こった脱原発運動の大きなうねりの中で、氏と寂聴尼が志を同じくされていたことが、念頭にあったからだ。

四国徳島へ来てもらうには、出演交渉しなければならない。まず手紙を書いた。そして氏に接近できる千載一遇の機会をとらえて上京した。意気ごんで切り出した私に対し、開口一番、「瀬戸内さんを語れる人は他にたくさんいるはず。僕なんかとても……」とおっしゃって、それは君の買いかぶりにすぎぬよと、やわらかにかわされるふうだった。

結局、当方のしつこさに、鎌田氏は根負けされたのだとおもう。あるいは、当歳50の文学少年の成れの果ての熱意に、ほだされてくださったのだろうか。まあいずれにせよ、11月11日、故人の生まれ育った徳島市で、「美は乱調にあり～大杉栄没後一〇〇年、現代社会への問い～」と題する講演会を開催できたのはありがたかった。

ただ当講演は、掲げた演題と異なり、故人の社会運動家としてのありようをクローズアップするものになった。大杉栄の人と思想について理解を深めようと会場に足を運んでくれた人たちには済まなかったけれども、現在の私は、あれでよかったのだとおもっている。

鎌田慧氏来徳の最大の置き土産は何だったろう。これはあくまで大石一個人の感想だが、日本社会への瀬戸内寂聴の直言集と言ってよい『それでも人は生きていく』（皓星社、２０１３）の重要性に気づかせてくれたことが、何より大きい。（講演要旨とともに徳島新聞紙上に載った写真、あの中で鎌田氏が手にしているのがその本だ。それこそ、故人をしのぶ記念の品のはずが、電車の網棚へ忘れておいでになったため、当地で急遽用意したもの。つまり、鎌田氏宛て感謝の添え書きがなされたサイン本ではない。）

マイナーな出版社から刊行されたこの一冊、「冤罪・連合赤軍・オウム・反戦・反核」の副題が示すように、きわめてリベラルなメッセージ性に富む。巻末に鎌田氏による長文解説「エロスと反逆」を付したのは、瀬戸内晴美対談集『生きるということ』（１９７８）を出すかたちで創業した社主・藤巻修一の発案だろうか。

いい気なもので、人は出家得度のほんとうの理由を知りたがる。井上荒野の小説『あちらにいる鬼』が映画化された近年では、井上光晴との愛人関係を清算するため、という見方が一般化しているようだ。果して、そうか。

私が出家したのは、洋子さんたちが逮捕された翌年の十一月でした。私が出家したくなった時の、何ともいいようのない暗い世界の動きが、私の出家をうながした一因になっていたことも思い出します。

自序「九十一歳の遺言として」をもつ本書を読み進めるうち、右の一節に出くわした。文中の「洋子さん」というのは、一連の連合赤軍事件で死刑判決を受けた永田洋子のことだ。彼女が逮捕されたのが１９７２年。不肖大石は、その年の11月の生まれである。

２０２１年の1月に急逝した坪内祐三によれば、古きものと新しきものとのせめぎあいにほかならぬ「高度成長期の大きな文化変動は１９６４年に始まり、１９６８年をピークに、１９７２年に完了する」（『一九七二』）。文化変動のピークの前年に瀬戸内文学の大変革がスタート、完了の翌年、出離が決行されているのを、見逃すわけにいかない。いやむしろ、平仄が合いすぎて、怖いくらいなのだ。

このへんのところを、同じ時代を生きてきた稀代のルポライターは、どうお考えになるのだろう。

わたしは安保世代、国会前で「岸を倒せ！」と叫んでいた。全共闘運動がはじまった時はちいさな雑誌の編集者だった。昼は東京神田三崎町で日大学生のデモの熱気に圧倒され、勤め帰りには東大安田講堂前に日参していた。が、肝心の落城の日は肺炎で寝込み、テレビの音だけを聞いていた。

（「叛逆老人はいま」）

12月になった。講演会の明くる日にジャンボタクシーに同乗してご案内した上勝町ゼロ・ウェイストセンターの芝生広場のへりに立っていた栃の葉を押し花にしたのを、東京は清瀬在の鎌田氏に、私は送った。

虚飾という言葉から最も遠い、すっきりと黄葉した一樹を背にして立つ氏の姿が、今も目にあざやかである。

鎌田慧氏　徳島県上勝町にて

ひろば　会員のたより

「夢の桜」を上野村に

鷲尾博子（石山寺 副座主）

11月13日、群馬県多野郡上野村の日航ジャンボ機犠牲者の供養のために造られた「慰霊の園」に「夢の桜」を植樹した。植樹式には上野村の黒沢八郎村長、日航の相談室長、「8・12連絡会」事務局長の美谷島さんご夫妻も参加され、事故当時以来かかわってきた報道関係者の方たちにも見守られながら行われた。

「夢の桜」は、徳島の実家の母が日航ジャンボ機事故で亡くなった妹千延子（22）が多くの人々と一緒に満開の桜に包まれた山を登っていく夢を見たと語り、石山寺に犠牲者と同じ数の５２０本の桜の苗を送ってきたことに始まる。約３００本が根付き、花を咲かせている。

２０１８年の秋に母が亡くなり、かつて母が御巣鷹山の妹の墓標の周囲に、年齢と同じ22本の桜の苗木を植えたけれど、大半が風雪で枯れてしまったという話を聞いた。母の思いを知り、いつか桜を植えられたらなと漠然と思っていた。「夢の桜」は早咲きのヒガンザクラを中心に、カンピザクラ、コヒガンザクラ、オオシマザクラ、ベニシダレザクラ、シダレザクラ、フジザクラ、ソメイヨシノ、ヤエヤマザクラなど。普通の桜よりも早い時期に咲いて春の訪れを知らせてくれる。母は亡くなった５２０名一人ひとりの命の証を桜の木に託した。石山寺の「夢の桜」を見て、御巣鷹山がこの桜でいっぱいになったらどんなに素晴らしいだろうという訪れた方の声も届いていた。

19年の3月に御巣鷹の尾根の管理人である黒沢さんが石山に来た。「夢の桜」の数が減ってきているという話をすると、黒沢さんが種から桜を育てて送ってくれることになった。その時、私もこちらからもお返しが出来ればと思い、庭師さんに相談したが、難しいことのようだった。ところが、その年の台風19号によって、表境内の「夢の桜」の1本が折れてしまい、そこから「ひこばえ」が伸びてきたのを挿し木にして庭師さんが鉢植えで10本育て始めてくれた。御巣鷹に桜をという願いがだんだんと実現へ向かっていった。

あの事故から時がたつにつれ、当時あの大きな事故に臨んでお世話をしてくださった地域の方々にお礼が言えなかったことが心残りとなっていた。また毎年の慰霊行事に通うことができなかったので、遺族の思いに寄り添い、支え続けてくださる方々への感謝の気持ちが伝えられず心の中でくすぶっていた。

21年に、瀬戸内寂聴先生と夫を相次いで亡くした。声をかけてくださる方があって、翌年5月に30年ぶりに御巣鷹山に登った。

30年ぶりの山で目にしたのは災害に遭いながらも村が整備を繰り返し、日航社員や事故の遺族、震災の被災者など有志の方々が小屋や水源を修理し、墓標を整備し、守り続けてくれている姿だった。そういう人たちの手で御巣鷹山は悲しいだけではない、優しく迎えてくれる山になっていた。日航機事故の遺族だけではなく、災害や事故、事件などで大切な人を亡くした人たちが訪れる聖地のような存在になっていると知った。この桜が大きくなって花を咲かせ、これからも亡くなった方々を慰め、山を訪れる人たちを照らしてくれたらと願っている。

群馬県上野村村長と「夢の桜」を植樹

寂聴のことば

「吾れ、常に、ここにおいて、切なり」

（洞山和尚）

秦慧玉禅師は、切とは切っても切れないこと、一つの物事に成りきることだと教えていられる。この語を知ってから、私は何かにつけ、「吾れ、常に、ここにおいて、切なり」と心につぶやく。すると心の中に涼しい風がおこり、もやもやした俗情がさっぱり吹き払われてくる。思えば、私はそういう自覚もないまま、ひたすらに、五十年の半生を、切に生きることに終始してきたと思う。切に生きることは苦しい。けれどもまた、切に生きるほど、自分の生命の躍動と、可能性の未来を感得させてくれる生き方があろうか。

『嵯峨野より』（竹内紀子）

瀬戸内寂聴先生は妹の死を「無常」という言葉で応えてくれた。ものごとはすべて移り変わっていく。昨日と同じ日常が今日も明日も続くとは限らない。自分の気持ちの落ち着く先が見えた気がした。だからこそ今を大事に生きるのだと。焼け焦げた山肌に草木が生え、小鳥がさえずり、花が咲いている。無常とはあきらめの言葉ではなく希望でもあると思えた。

事務局から

機関誌「寂聴」３号　11月に発行を予定しています。原稿の締切りは９月15日です。投稿をお待ちしています。

記念会会員を募集しています。年会費は３０００円です。

瀬戸内寂聴記念会　事務局
〒770-0856 徳島市中洲町3-40-802
Fax　088-661-3292
email　norikomizugame@yahoo.co.jp